

現代日本語の名詞分類に向けて

——結合関係に基づいて——

Towards a Collocational Grouping of Nouns in Modern Japanese

岡田 幸彦*

OKADA Yukihiro

語の分類として、国立国語研究所（1964）等のような、純粋に語義に基づくものがあるが、より形式に裏付けられたものとして、その語の文中での用法に現れる語義の特徴に基づく方法が可能ではないだろうか。本稿では、「名詞+が/を/に/で/から/まで/へ」といった「名詞+格助辞」による他の語との結合関係において明らかになる語義の特徴に基づく、現代日本語の名詞分類を提案する。

この方法によって、「名詞+が+動詞」「名詞+に+動詞」における用法から「意志を持つ人」を表す名詞を、「名詞+を/に+移動を表す動詞」「名詞+に+いる/ある」「名詞+で+動作・活動を表す動詞」等から「地点・場所・空間」を表す名詞を、「名詞+が+起こる」「場所を表す名詞+で+名詞+が+ある」「名詞+で+動詞」等から「自然現象／社会的現象」を表す名詞等を選び出すことが可能である。ただし、「名詞+を+動詞」「名詞+が+形容詞」における用法のように、結合する動詞・形容詞ごとに名詞のグループを考えなければならない場合もある。

キーワード：現代日本語、名詞分類、結合関係

0. はじめに——語義に基づく分類と文中での特徴的な用法に基づく分類

語彙を分類した記述はシソーラス、分類語彙表と呼ばれる。日本語のシソーラスの代表的なものとして、国立国語研究所（1964）、同（2004）がある。これは各語の語義に基づく分類といえることができる。だが、純粋に語義の面から語彙体系を記述する方法のみでなく、その語の文中での用法において明らかになる語義の特徴に基づいて記述することが可能ではないだろうか。

宮島（1966：146）は、「ある単語の意味を説明するということは、意味体系中におけるその単語の位置を説明することにほかならない」¹と位置づけた上で、以下のように述べる。

意味にとっての形式とは、語形だけではない。ある単語がどのような種類の単語とむすびついてつかわれるかということも、やはりその単語の意味にとっては1つの形式であり、その単

* おかだ・ゆきひこ、埼玉大学教育機構非常勤講師、言語学

¹ ある語の語義を同一の言語によって説明する場合について、宮島（1966：153）はさらに、「対象語と説明語とがおなじ言語体系に属しているばあい、言いかえは、対象語を意味的な体系のなかに位置づけるという積極的な役わりをはたしている。」（引用注：「対象語」＝説明される語）「国語辞典における意味の説明が1対1の訳語でされるとき、それは類義語辞典とおなじかたちになる。」としている。

語が意味体系内でしめる位置をあきらかにする手がかりとしてはたらく。これも現実そのものの研究から直接にはでてこない。(宮島 (1966 : 166))

たとえば、日本語の名詞は、存在をあらわす動詞の「ある」とむすびつくか「いる」とむすびつくかによって、大きく2つに分かれる。道具・自然物・性質などの名まえは「アル」群に、人間や動物の名まえは「イル」群に属する。ここまでは、無生物と生物という外界の分野に一致するのだが、注意すべきことは、植物が「アル」群に属することだ。したがって、この対立は、無生物対生物というものではなくて、人間をふくめた動物対その他一切ということになる。日本語の「いきもの」ということばには、元来植物がふくまれていないことも、この分類と一致する。(同 (同 : 167))

宮島 (1966) は、「ゆうれい」が「イル」群に属しながらも「1 びき」「2 ひき」とも「ひとり」「ふたり」とも数えないことから、動物とも人間とも違う種類であろうということ、「風」が「風がやむ (よわまる・つづく)」という「移動」「上昇」「変化」などはたらきを表す名詞と同様の表現において用いられるが「さむい空気の風」のような表現も「風 (を) する」のような表現もなく、ものとの中間領域に属するであろうとも述べている。

また、同 (1972 : 669) は、「単語がつかわれる条件」「言語的条件」を「文法的条件」と「語いの条件」に分け、「文法的条件」には「その単語自身の語形」と「その単語が直接に結びついている他の単語の語形」があるとし、同時に、「語いの条件」にも言及する。

…他の単語の語形によってしめされた条件というのは、「文法的文脈」といいかえることができるだろう。たとえば、

まちへ かえる (移動)
まちを つくる (はたらきかけ)
まちで あそぶ (動作)
まちに いる (存在)

などでは、それぞれ、動詞の語形ではなくて、これと結びついている「まち」という名詞の語形が、これらの動詞にとって文法的条件になっているのである。「まちへ」「まちを」などと名詞の語形がそれぞれにちがっていることが、これと結びつく動詞の意味的な側面を明らかにする。… (宮島 (1972 : 669-670))

このような文法的条件 (文法的文脈) とならんで、語いの条件 (語いの文脈) もまた、単語の意味を明らかにするのに役に立つ。文法的条件が同じであっても、「川 (海、プール、水の中) でおよぐ」というのと「グラウンド (道、原っぱ、にわ) ではしる」というのとをくらべると、「およぐ」「はしる」が、それぞれどのような場所で行なわれる動作であるかに、はっきりちがいがあることがわかる。「～で」というかたちは、どちらもその動作が行なわれる場所を示して

いる。そのかぎりでは、文法的文脈はおなじである。しかし「およぐ」が水の中で行なわれる動作であり、「はしる」が陸の上で行なわれる動作であることは、これと結びつく名詞の種類によって明らかにされる。(宮島 (1972 : 670))

上掲の位置づけから、宮島 (1972) による「文法的文脈」「語文的文脈」として、どのような動詞が、どのような名詞のどの格形式との結合において用いられるか等を挙げることができる。

一方、城田・ユン (2015 : 3-6) は、「語はどのようにして他の語とむすびつき、文へと展開されるのだろう。」として、「文法の規則に従って結びつく」「文体的統一が図られる」「意味・機能は同じでも異なる語が選ばれる」という面を挙げている。

- (1) 花子は美しい着物を着ていた
- (2) 花子はピンクのスカートをはいていた
- (3) 花子はシックな帽子をかぶっていた
- (4) 花子は度の強い眼鏡をかけていた

「着る」「(1)」、「はく」「(2)」、「かぶる」「(3)」、「かける」「(4)」は他動詞であり、これら動詞を用いる限り、着用者（主役一例文では花子）を表わす名詞はガ格に、着用物（相手役一着物、スカート、帽子、眼鏡）を表わす名詞はヲ格に立たなければならない…。ガ格は、また、ハでとりたてられると、ガという概要は「強制消去」され、ハのかたちで現われる…。以上のような結びつき上の決まりは文法が定める。語は各語の性質（品詞）によって文法的特性を持ち、文法の力（主として「支配」の強制力。…）によって他の語に結びついたり、結びつけられたりする。(城田・ユン (2015 : 4))

…語には…語感というものがあり、場の雰囲気に合わせて、文にする場合、他の語とのバランスを調整したりする。一般的には文は文体の規制を受け、文体的統一がはかられる。文体がちがはぐな語はむすびつきにくい。(同 (同 : 4-5))

…英語なら、…*put on* で表現することができる。しかし、日本語では、「着物」だったら「着る」、「スカート」だったら「はく」、「帽子」だったら「かぶる」、「眼鏡」だったら「かける」といいかえなければならない。着用するものによって、着用動作を表わす動詞が異なるのである。語彙上の慣用的な統合規則のようなものが働いていると見ていいであろう。(同 (同 : 5))

名詞の文中での用法のうち、最も形式に裏付けられているのは、宮島 (1972) 「文法的文脈」、および、城田・ユン (2015) 「文法の規則に従って結びつく」において提出されている、特定の「格」による他の語との結合関係であるといえる。その枠の中でより詳細な語彙的文脈、あるいは、文体的・慣用的規則等を明らかにしていくことが確実な名詞分類につながるのではないだろうか。

…連語とは、ほかの単語とのむすびつきだから、語法的条件がきりはなせない。

道を つくる

道を ながめる

道を あるく

これらにおける名詞と動詞との関係は、それぞれちがっている。つまり、これらはちがった型の連語に属する。この連語としての関係そのものは文法的なものであり、したがって、このような名詞とむすびついてこのような関係をつくりうることも、おのおのの動詞の文法的性質（能力）ではあるが、その性質をささえているものは、これらの動詞の意味上の性格である。そして、文法的なむすびつきを細分していくと、それはしだいに語法的なむすびつきとしての性格をつよめ、そのさかい目は、はっきりしない。…（宮島（1972：686-687））

何らかの格形式により、他の語との結合において用いられることは、上掲の宮島（1972：686-687）の位置づけのように、各語の語義と直接関係があり、その各用法においては、結合の中心である動詞等の語義の特徴と同時に、結合している名詞の語義の特徴も明らかになると考えることができる。本稿では、特定の格形式による他の語との結合関係に基づく名詞分類の可能性を探る。

1. 名詞の文法的用法²

1.1. 「名詞+格助辞」

現代日本語名詞の格形式として、第一に、「が/を/に/で/…」のような、「非自立的な形態素で、広義の接辞にふくまれるが、前後の形式から相対的に独立していて、その単語性もつよい。ただし、語彙的な意味をもたず、文法的な意味だけをになう。」という「助辞」（村木（1991：27-28））の一種である「格助辞」をとめない、他の語との結合において用いられることが挙げられる。これは名詞自体の文法形式であるという点で「その単語自身の語形」であり、同時に、他の語との結合において現れるという点で「文法的文脈」としての面も持っているといえることができる（上掲の宮島（1972：669-670）参照）。以下、格助辞をとまなう名詞の他の語との結合関係を名詞分類にどのように応用できるかをみておく³。

橋本（1969：54）は、「格助詞」という呼び方で「つづく助詞で、體言又は之と同資格のことばにのみつく。さうして、その體言が、どんな関係で、他のことばにつづくかを區別して示すものである。」と規定し、「が」「の（「が」の意味）」「を」「に」「と（列挙するもの以外）」「へ」「より（比較）／よりか」「で（「に於て」「を以て）」」「から」（「以上」「以外」の意味以外のもの）を挙げている。

一方、鈴木（1972：204-206）は、「格のくつつき」という呼び方で「名詞が文や連語のなかで他の単語に対してとることがら上の関係（素材＝関係的な意味）のちがいをあらわす文法的なカテゴリ

² この節は拙稿（2016）、（2017）、（2018）、（2022）を元にした。「文の成分」としての面から見た「名詞+格助辞」については別稿で考察中。なお、必要な例は繰り返し引用した。

³ 「格」の一般言語学的な位置づけについては以下を参照。“Case is a system of marking dependent nouns for the type of relationship they bear to their heads.”（格とは、従属する名詞を、その主要語に対してもつ関係の型について印付ける体系である。）（Blake（2001: 1））

一を格という。格の文法的な形をつくるくつつきが格のくつつきである。」と規定し、「——（ゼロ）（はだか格＝名まえ格）」「——が（が格＝ぬし格、し手格）」「——を（を格＝うけ手格）」「——に（に格＝ありか格、あい手格）」「——へ（へ格＝ゆくさき格）」「——で（で格＝しどころ格、てだて格）」「——と（と格＝ななかま格）」「——から（から格＝でどころ格）」「——まで（まで格＝とどき格）」「——の⁴（の格＝もちぬし格）」「——への（への格＝連体ゆくさき格）」「——での（での格＝連体しどころ格）」「——との（との格＝連体ななかま格）」「——からの（からの格＝連体でどころ格）」「——までの（までの格＝連体とどき格）」という「格の文法的な形」を挙げている。

本稿では、「名詞+格助辞」のうち、橋本（1969）と鈴木（1972）において共通に「格」として扱われるものに「名詞+まで」を加え、一方、同種のもが表示される「名詞+と」を除き、「名詞+が」「名詞+を」「名詞+に」「名詞+で」「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」の他の語との結合関係に現れる名詞の語義の特徴を見ていく。以下にそれらの用法の大まかな性格付けをしておく。

1.2. 「名詞+が」の用法

(1) の文中において、「千太郎が」は「鉄板から顔を上げる」という動作の主体を、「(白い帽子の) 高齢者が」は「桜の木の下に立っている」という存在の主体を、それぞれ表している。

- (1) 千太郎が鉄板から顔を上げると、白い帽子の高齢者がまた桜の木の下に立っていた。(『あ
ん』19)

増井（1997）は「が」について以下のように位置づけている。

…「が」の起源は、連体修飾語にある。「が」は、「梅が香」「我が君」のように、すぐ下の体言を修飾することばであった。それが、「言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ独り子にあるが苦しき」（万葉集）に見られるように、形式的には連体修飾語でありながら、意味的には主格を示す一時期をもつに至る。そして、「まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。」（枕草子）とか、「わびゆかぬさまゆかしき人かなと目にとまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとう似たてたてまつれるが、まもらるるなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる。」（源氏若紫）のように主格を示すようになる。（増井（1997：3-4））

「名詞+が」は、続く名詞の「持ち主」を表していたものから、続く動詞・形容詞によって表される動作・状態等の「持ち主」である「主体」を表すようになったと考えることができる。「名詞+が」を「主格表示成分」⁵と呼ぶことができる。

なお、「名詞+が」には以下のような用法もある。

⁴ 橋本（1969）が「の」を「連体助詞」として「格助詞」から除外しているのに対し、鈴木（1972）は、「の」も「格のくつつき」に入れている。「の」の扱いおよび「連体」自体についてさらなる検討が必要ではないだろうか。

⁵ 「名詞+が」は、Lyons (1977: 504) による「grammatical subject」に相当するといえる。

(2) 右手の前方に白いビルが見える。 (『椿山課長の七日間』 21)

(3) 「何が怖かったですか?」 (『きつねのはなし』 16)

(2) 「(白い) ビルが」は「右手の前方に 見える」知覚の対象を、(3) 「何が」は「怖い」心理状態の対象を表している。「ビルが」は「右手の前方に 見える」主体、一方、「何が」は「怖い」主体として、それぞれの対象を表しているということが可能ではないだろうか。どちらも動詞・形容詞にとって最も密接な関係がある名詞ということができる。

1.3. 「名詞+を」「名詞+に」の用法

「名詞+を」は、奥田 (1968-72) にまとめられているように、動詞との結合において、動作の対象、移動にかかわる場所等を表す。

(4) ボストンバッグに下着の替えと洗面用具、それから菓のいっぱい詰まった紙袋を投げ込むと、勢いよくジッパーを閉めた。 (『ポプラの秋』 8)

(5) 信夫は今、鏡にむかってつくづくと自分の顔をみつめていた。 (『塩狩峠』 5)

(6) 菊は、迫害されて十字架につけられた、イエス・キリストを思った。 (『塩狩峠』 48)

(7) 夜遅く、私たちはポプラ荘を出た。 (『ポプラの秋』 99)

(8) 今日一日だけで幾人がこの道を通るだろう。 (『満願』 9)

(4) 「下着の替えと洗面用具、…紙袋を」は「ボストンバッグに 投げ込む」直接対象を、「ジッパーを」は「閉める」直接対象を、(5) 「顔を」は「みつめる」知覚対象を、(6) 「イエス・キリストを」は「思う」思考対象を、(7) 「ポプラ荘を」は「出る」の出発地点を、(8) 「(この) 道を」は「通る」の通行地点をそれぞれ表している。(7) (8) では場所を表す名詞であるという条件もあるが、基本的には「名詞+を」の文中での意味は結合する動詞の語義の特徴によって決定されるということができる (0 に引用した宮島 (1972 : 686-687) の位置づけを参照)。

「名詞+に」も、動詞等との結合においてさまざまな用法がある (動詞との結合の詳細については奥田 (1962) 参照)。

(9) 「なにを言ってるの? あんが命でしょ、店長さん」

「はあ……まあ、だから吉井さんに来てもらおうと」 (『あん』 27)

(10) 門の脇に制服を着た係員が立っていた。

「あの方にお訊ねしてみましょうよ」 (『椿山課長の七日間』 23)

(11) 店は、線路沿いの道から一本路地を抜けた桜通りという名の商店街にあった。 (『あん』 5)

(12) 後は家に帰って寝るだけだ。その前に一服つけようと喫煙室に行くと、梶井が先客で入

っていた。(『満願』12)

- (13) ボストンバッグに下着の替えと洗面用具、それから葉のいっぱい詰まった紙袋を投げ込むと、… (『ポプラの秋』8)

(9)「吉井さんに」は「来てもらう」相手を、(10)「あの方に」は「訊ねる」相手を、(11)「商店街に」は「店」が「ある」存在地点を、(12)「家に」は「帰る」到着地点を、「喫煙室」は「行く」到着地点を、(13)「ボストンバッグに」は「下着の替えと洗面袋…紙袋を 投げ込む」場所をそれぞれ表している。(9)(10)では人を表す名詞、(11)(12)では場所を表す名詞であるという条件もあるが、「名詞+に」の文中の意味も「名詞+を」の場合同様、結合する動詞の語義の特徴((9)では「来てもらう」という形)によって決定されるといえる。

以上のように、「名詞+を」「名詞+に」は、結合する語(主として動詞)の語義の特徴(あるいは形)によってその文中の意味が決定され、動作・状態に必要な対象(直接対象/相手/移動に関する地点)を表す「被支配-対象表示成分」と呼ぶことができる。

1.4. 「名詞+で」「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」の用法

1.4.1. 「名詞+で」の用法

「名詞+で」は、他の語との結合において、さまざまな文中の意味で用いられる(詳細は奥田(1967)参照)。

- (14) いつものようにぼくたち三人は、近くのハンバーガー店で買ったヨーグルトドリンクをストローで吸いながら、暗いバス停のベンチに座っていた。(『夏の庭』11)

- (15) 私は、優しい手つきで皿の破片を拾い集めている彼女の姿を思い描いた。(『きつねのはなし』25)

- (16) 私は、あなたは交通事故で亡くなったのだ、と言い続けるつもりです。(『ポプラの秋』184)

(14)「ハンバーガー店で」はヨーグルトドリンクを「買う」場所を、「ストローで」は「ヨーグルトドリンクを 吸う」道具を、(15)「(優しい) 手つきで」は「(皿の) 破片を 拾い集める」様態を、(16)「交通事故で」は「あなた」が「亡くなる」原因をそれぞれ表している。「名詞+で」は、名詞の語義の特徴によってその意味が決定され、結合する語に情報を加える「付加成分」とであるといえる。

1.4.2. 「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」の用法

「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」は、いずれも格助辞自体が明確な意味をもっていると考えることができる。

(17) そのまま奥の「ドアから」細い廊下に出る。(『椿山課長の七日間』29)

(18) 川藤が殉職した日は、「朝から」おかしな事が続いていた。(『満願』27)

(17)「ドアから」は「廊下に出る」という移動が始まる地点を、(18)「朝から」は「おかしな事が続く」という事象が始まる時点をそれぞれ表している。どちらも「から」が名詞に「開始点」の意味を与え、結合する語にその情報を加える「付加成分」であるといえる。

(19) その日、中野にある職場を出た倉田太一は、「総武線で新宿まで」行き、そこで JR 山手線に乗り換えた。(『ようこそ、わが家へ』7)

(20) 自分はつい「さっきまで」料理屋にいた。(『椿山課長の七日間』24)

(19)「新宿まで」は「総武線で 行く」という移動が終わる地点を、(20)「(つい) さっきまで」は「料理屋に いる」という存在が終わる時点をそれぞれ表している。「名詞+から」の場合同様、どちらも「まで」が名詞に「終了点」の意味を与え、結合相手の語にその情報を加える「付加成分」であるといえる。

(21) いつもよりゆっくり目に新宿駅を出発した電車は、まだダイヤが乱れているのか途中で小休止したりしながら次の「代々木駅へ」向かう。(『ようこそ、わが家へ』7)

(22) 私はそのまま、その黒光りする小箱を「天城さんの方へ」押しやった。(『きつねのはなし』13)

(21)「代々木駅へ」は「向かう」という移動の目的地点⁶を、(22)「天城さんの方へ」は「小箱を押しやる」方向をそれぞれ表している。「名詞+へ」は、「名詞+に」と異なり、結合する語によって存在地点と到着地点を表し分けることはなく、目的地点・到着地点・方向という違いはあっても、常に移動の行く先を表すと考えることができる。「名詞+から」「名詞+まで」同様、「へ」が名詞に「行く先」の意味を与え、結合する語にその情報を加える「付加成分」であるといえる。

名詞の語義の特徴によって意味が決まる「名詞+で」とは決定要因が異なるが、「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」もまた、結合相手の語に情報を加える「付加成分」であるといえることができる。

次節以降、以上の位置づけに基づいて、「名詞+格助辞」と他の語との結合から、名詞の語義のどのような特徴が明らかになるか、どのような語彙分類が可能か、その際の問題点は何かを考察する。

2. 「名詞+が」と他の語との結合から明らかになる名詞の語義の特徴

2.1. 動作・活動を行う主体としての人を表す「名詞+が」の用法から

「名詞+が」の用法で多く見られるのは、「名詞+が+動詞」が人とそのさまざまな動作（存在を含

⁶ 拙稿（2009）では「移動の目的地」とした。

む) ものであり、動詞は広い分野にわたる。「名詞+が」は「動作・活動を行う主体としての人」を表す。

(a) 人の具体的動作

(23) そのとき、奥のほうに坐っていたアフリカ人が敦子のほうに手を挙げた。(『雲の宴(上)』24)

(24) 知らない男の人が、すぐそばまで来て舌を出して 逃げていく。(『春のオルガン』6)

(b) 人の知覚活動

(25) それにもかかわらず敦子は誰かが自分をじっと見ているのを感じた。(『雲の宴(上)』27)

(c) 人の言語活動

(26) ホールの中央に立った係員が、よく通る声で言った。(『椿山課長の七日間』29)

(d) 人の感情

(27) さっき水無瀬大吉が手ばなしで感激していた人民の高揚感も一つの事実だが、こうした憎悪、復讐欲、途方もない激情ももう一つの事実なのだ…(『雲の宴(上)』22)

(e) 人の移動

(28) 「ぼくの悪い癖で、アフリカ人以外にはアフリカのことは分らんとすぐ思いこむものだから。しかしあなたがアフリカにいらっしゃれば、どうしてぼくがこんなことを言うか、お分りになると思いますよ」(『雲の宴(上)』28)

(f) 人の存在

(29) 「もう一人仲間がいます。カメラマンですが。二人で古都マンディゲを中心にセレールの生活や文化をルポしたいと考えているんです」(『雲の宴(上)』26)

(30) 門の脇に制服を着た係員が立っていた。(『椿山課長の七日間』23)

(23)「アフリカ人が」は「敦子のほうに 手を 挙げる」主体を、(24)「男の人が」は「すぐそばまで 来て 舌を 出して 逃げていく」主体を、(25)「誰かが」は「自分を じっと 見ている」主体を、(26)「係員が」は「よく通る声で 言う」主体を、(27)「水無瀬大吉が」は「感激する」主体を、(28)「あなたが」は「アフリカに いらっしゃる」主体を、(29)「仲間が」は「いる」主体を、(30)「係員が」は「門の脇に 立っている」主体をそれぞれ表している。(27)(29)のような場合を除けば、「意思を持って何らかの動作・活動を行う主体としての人」を表す名詞であるが、「人を表す名詞」全般が用いられるということもでき、「名詞+が+動詞」における用法からは、それ以上の下位分類が可能であるとはいえない。

2.2. 人以外を表す「名詞+が」の用法から

人の動作・活動を表す動詞が「人以外を表す名詞+が」とともに用いられる場合がある。

(31) タバコをつけたとたん、ガツンと強い痛みが首筋に走った。(『椿山課長の七日間』18)

- (32) まだ絶版にはなっていないくて、装丁を変えた復刻版が出ているらしい。(『レインツリーの国』11)
- (33) 「フランスだって重いですよ。どうしてどうして決して身軽に立ちまわっているわけじゃありません。もうそろそろ結果が出るはずですよ。今ごろみんなテレビの前に釘づけでしょう」(『雲の宴(上)』12)
- (34) 大学を卒業し、関西から上京して入社三年目——東京にも仕事にも少しは慣れて、余裕が出てきたことがそんなものを思い出させたのかもしれない。(『レインツリーの国』10)

2.1 の場合と同じように考えれば、(31)「痛みが」は「首筋に 走る」主体を、(32)「復刻版が」は「出ている」主体を、(33)「結果が」は「出る」主体を、(34)「余裕が」は「出てくる」主体をそれぞれ表していることになるが、これらの用法における「走る」「出る」は「人を表す名詞+が」との結合における用法とは別義であるといえる(「出る」のさまざまな用法と語義については宮島(1972: 563-607) 参照)。「名詞+が+走る/出る」という結合全体が何らかの現象・出来事を表しており、さらには、「名詞+が」として用いられている名詞が「走る」「出る」の語義を決定している、ということができるであろう。どのような名詞にこのような用法があるのか、「走る」「出る」以外の人の動作・活動を表す動詞についても記述する必要がある。

2.3. 知覚される対象を表す「名詞+が」の用法から

「名詞+が 見える／聞こえる」という結合は、何かが知覚されることを表す。

- (35) 敦子は大吉の姿を眼で追いながら、湧き立つ波のような群衆の中を泳ぐように動いた。しばらくして急に大吉の姿が見えなくなった。(『雲の宴(上)』20)
- (36) 長い坂の上にある古い屋敷で、裏手には常暗い竹林があり、葉の擦れる音が絶えず聞こえていた。(『きつねのはなし』9)

(35)「(大吉の) 姿が」は「見えなくなる」主体であり視覚でとらえられる対象を、(36)「(葉の擦れる) 音が」は「聞こえる」主体であり聴覚でとらえられる対象をそれぞれ表している。これらの用法から、「視覚でとらえることができる像」、「聴覚でとらえることができる音響」といった、「感覚でとらえることができる対象」を表す名詞を選び出すことが可能になる。

2.4. 自然現象／社会的な出来事を表す「名詞+が」の用法から

以下の例では、「名詞+が+動詞」によって自然現象／社会的な出来事が表されている。

(a) 自然現象が表される場合

- (37) まさか。雷かしら——敦子がそう思う間もなく、ふたたび稲妻が光り、ダントンの銅像が天を指すように腕をあげて闇からくっきり浮び上った。(『雲の宴(上)』22)

(38) 驚いて顔をあげると、閃光を追うようにして、板を連続して打ちつけるような雷鳴がとどろいた。(『雲の宴 (上)』22)

(39) パリ大学医学部の前を通っているとき、ぽつぽつと大粒の雨が降りはじめた。(『雲の宴 (上)』23)

(40) 毛沢東が死んだ年も、中国では不思議と大地震が起った。(『雲の宴 (上)』23)

(b) 社会的な出来事が表される場合

(41) 私はクラスの代表で卒業証書を受けとることになっていたのに、式が始まったとたん、なんだか気持ちが悪くなってきた。(『春のオルガン』7)

(42) 歴史的事件が起るとき、かならず天変地異がそれに伴うものだ。(『雲の宴 (上)』23)

(43) 「私はフランスについて深いことは知りません」敦子は率直に言った。「ただ保守派の政治が行き詰まって、経済活動が低下し、失業者が増えているということぐらいの知識しかありません。…」(『雲の宴 (上)』29)

(37)「稲妻が」は「光る」主体を、(38)「雷鳴が」は「とどろく」主体を、(39)「雨が」は「降り始める」主体を、(40)「大地震が」は「中国で 起る」主体を、(41)「式が」は「始まる」主体を、(42)「歴史的事件が」は「起る」主体を、(43)「経済活動が」は「低下する」主体をそれぞれ表していることになるが、これらの場合は「名詞+が」によって結合全体が何を表すかが決定されていることができるだろう。これらの用法から、自然現象を表す名詞・社会的な出来事を表す名詞を選び出すことが可能になる。

2.5. 「ある」との結合における「名詞+が」の用法から

植物／物体の存在は「名詞+に (存在地点) 名詞+が ある」という結合によって表されるが、出来事・社会事象の発生は「名詞+で (地点) 名詞+が ある」という結合によって表される。

(44) 長い坂の上にある古い屋敷で、裏手には常暗い竹林があり、葉の擦れる音が絶えず聞こえていた。(『きつねのはなし』9)

(45) 少し前にどこかの駅で人身事故があったらしく電車が遅れ、…(『ようこそ、わが家へ』7)

(44) では「裏手に」という地点に「竹林が」存在することが、(45)では「どこかの駅で」という地点で「人身事故が」発生したことを表している。

しかし、植物／物体以外にも「名詞+に 名詞+が ある」という結合によってその存在が表される名詞がある。

(46) でもその声には、なんだかからかっているみたいな感じがあって、私は少し、くやしい。(『春のオルガン』5)

このような用法は、植物／物体、あるいは、社会的な出来事を表す名詞以外を選び出す手段となることが考えられる。

2.6. 「名詞+が+形容詞」の用法から

「名詞+が」が形容詞と結合している場合には、(3)「何が 怖い」のような対象を表す場合を除いて、その状態・性質の主体を表す。

- (47) 「実は私も、妙に気分がいいんです。ここのところ体調が悪かったんですけど、疲れもすっかりとれてしまって」(『椿山課長の七日間』22-23)

(47)「気分が」は「いい」主体を、「体調が」は「悪い」主体をそれぞれ表している。このような場合、「名詞+が+形容詞」という結合全体として何らかの状態・性質を表し、特定の形容詞と結合可能な名詞のグループを選び出すことができる。

2.7. 「名詞+が」の用法からの名詞分類の可能性

以上より、「名詞+が」と他の語((α) - (δ)は基本的に動詞)との結合から、

- (α) 意思を持って動作・活動を行う人を表す名詞
- (β) 人の動作・活動を表す動詞の語義に変更をもたらす名詞
- (γ) 一定の動詞とともに用いられ、自然現象・社会事象を表す名詞
- (δ) 「ある」による存在を表す文に基づく、物体を表す名詞／社会事象を表す名詞／その他の名詞
- (ε) 知覚を表す「名詞+が+動詞」、何らかの状態・性質を表す「名詞+が+形容詞」における、結合相手の語ごとの名詞のグループ

といった名詞分類が可能である。

3. 「名詞+を」「名詞+に」と他の語との結合から明らかになる名詞の語義の特徴

3.1. 「名詞+を」と他の語との結合から明らかになる名詞の語義の特徴

3.1.1. 動作の対象を表す「名詞+を」の用法から

1.3 で見たように、「名詞+を」は、動詞との結合において、動作の対象(直接対象／移動に関係する地点)等を表す。

(a) 動作を受ける対象

- (48) つかまえてやろうと思っても、私の体は土の上で死にかけている魚みたいに重たくて、

自分の腕をどうやって動かしたらいいのかさえ、わからないのだ。(『春のオルガン』5)

- (49) 「その通りです」相手はまた煙草を取り出し、それに火をつけた。(『雲の宴(上)』30)

- (50) 私はクラスの代表で卒業証書を受けとるになっていたのに、式が始まったとたん、

なんだか気持ちが悪くなってきた。(『春のオルガン』7)

(b) 知覚される対象

(51) 信夫は今、鏡にむかってつくづくと自分の顔をみつめていた。(『塩狩峠』5)

(52) 敦子は窓の外でびしょびしょ音をたてている雲の音を聞いていた。(『雲の宴(上)』261)

(c) 心理的な対象

(53) 隙のない大人たちの包囲網でどんどん主人公たちが追い詰められていく展開に、息苦しいような閉塞感を覚えました。(『レインツリーの国』12)

(48)「腕を」は「動かす」対象を、(49)「煙草を」は「取り出す」対象を、(50)「卒業証書を」は「受けとる」対象を、(51)「顔を」は「みつめる」対象を、(52)「(雲の) 音を」は「聞く」対象を、「閉塞感を」は「展開に 覚える」対象をそれぞれ表している。これらの場合、「動かす」と結合するのは「動かすことができる物を表す名詞+を」、「取り出す」と結合するのは「取り出すことができる物を表す名詞+を」、「受けとる」と結合するのは「受けとることができる物を表す名詞+を」、「みつめる」と結合するのは「見つめることができる物」、「聞く」と結合するのは「聞くことができる音声を表す名詞+を」…ということになり、動詞に応じて名詞が選び出されることになる。ここでは、宮島(1972)による「語一的条件」あるいは城田・ユン(2015)による「語彙上の慣用的な統合規則」に応じた名詞のグループが形成されていることが考えられる。個々の動詞の語義の記述とともに考えなければならないのではないだろうか。

本来結合しないであろう「名詞+を」が用いられると、その動詞は転義において用いられる。

(54) 将来の高望みはしないが、ここで潰されてはならない。ささやかな幸福を壊すわけにはいかない。(『椿山課長の七日間』12)

「幸福」には物理的な外形がなく、本来なら「壊す」ことはできない。「幸福を 壊す」と結合することによって、「壊す」が転義において用いられているとすることができる。各動詞について、その語義に変更をもたらす「名詞+を」にどのようなものがあるかを基準として、名詞を選び出すことも可能ではないだろうか。

3.1.2. 移動に関する地点を表す「名詞+を」の用法から

「名詞+を」は、動詞との結合において、出発地点を表わす場合、通行地点を表す場合がある。この違いは結合する動詞の語義の特徴によるとすることができる(拙稿(2009)⁸)。

(55) その日、中野にある職場を出た倉田太一は、総武線で新宿まで行き、そこで JR 山手線に

⁷ 記述に際して一種の「どうどうめぐり」(宮島(1966))が生じる危険性も考えられる。「名詞+を+動詞」という結合全体が何を表すかを基準にしなければならないのではないかと。

⁸ 拙稿(2009)では、それぞれ「移動の開始場所」「移動中の場所」と呼んだ。

乗り換えた。(『ようこそ、わが家へ』7)

- (56) 鬱蒼と茂る樹木の向こうには小高い山が見え、道を行く人の姿はほとんどない。(『この世界で君に逢いたい』13)

(55)「職場を」は移動「出る」の出発地点を、(56)「道を」は移動「行く」の通行地点をそれぞれ表している。これらの用法に基づいて、「地点・場所・空間」という語義の特徴がある名詞を選び出すことが可能になるが、どのような動詞との結合において、「名詞+を」が出発地点を、あるいは、通行地点を表すのかによって、さらに下位分類の可能性が考えられる。一方、移動する主体に応じて出発地点になりうる名詞、通行地点になりうる名詞にも違いがあるだろう。

- (57) 私はナツメさんに渡された風呂敷包みを脇に抱えて、冠木門をくぐった。(『きつねのはなし』9)

- (58) 房総半島を下る列車の窓から海を眺めながら、倉田ははしゃいでいた。(『ようこそ、わが家へ』12)

(57)「冠木門を」は「くぐる」の、(58)「房総半島を」は「下る」の通行地点を表しているが、(57)「くぐる」主体は「私」＝人であり、(58)「下る」主体は「列車」であって、「冠木門を」は列車の通行地点になりえず、「房総半島を」が人が徒歩で移動する通行地点になることは困難ではないだろうか。これらの場合、地点・場所・空間を表す「名詞+を」、動詞、移動主体を表す名詞という三語の関係が問題になる。

3.1.3. 「名詞+を」の用法からの名詞分類の可能性

以上より、「名詞+を」と他の語（基本的に動詞）との結合から、

- (α)「名詞+を+動詞」が何らかの対象への動作・活動を表す場合における、動詞ごとに結合可能な名詞
- (β)「名詞+を+動詞」として用いられた場合における、動作・活動を表すという動詞の語義に変更をもたらす名詞
- (γ)「名詞+を」が出発地点または通行地点を表す場合における、「地点・場所・空間」という語義の特徴を持つ名詞（ただし、どのような動詞との結合において、出発地点を、あるいは、通行地点を表すか、さらには移動主体との関係はどうであるかによって、下位分類の可能性はある）といった名詞分類が可能である。

3.2. 「名詞+に」と動詞との結合から明らかになる語義の特徴

「名詞+に」も動詞との結合において用いられ、動詞の語義の特徴に応じて文中の意味が決定される場合が多いが、名詞自体の語義の特徴が「名詞+を」の場合に比べて出やすいともいえる。

3.2.1. 意思を持つ人としての相手を表す「名詞+に」の用法から

以下の「名詞+に+動詞」において、「名詞+に」は動作の相手を表している。

- (59) どの部に見学に行こうかとうろろうしている僕に、榊井が言った。(『あと少し、もう少し』15)
- (60) 強張った表情をしている夏美に、聞いた。(『この世界で君に逢いたい』30)
- (61) 「お父さん、そんなみっともない真似、やめて。そんなにまで、しないで。駄目なら、いいじゃない。お父さんの親切、分らない人に、頼むことないわ」(『雲の宴(上)』172)
- (62) 「…建築を専門にしている友人に、石材や砥石の材料になる砂岩を見せてもらったことがあるんだ」(『この世界で君に逢いたい』26)
- (63) 「…ぼくがやったのはミラノの工場主に頼まれて、巨額のリラをスイスに運ぶ仕事だった。何十億リラなんてふつうだった」(『雲の宴(上)』306)

(59)「僕に」は「榊井が 言う」相手を、(60)「夏美に」は「聞く」相手を、(61)「(分らない)人に」は「頼む」相手をそれぞれ表しており、いずれもいわば「受け手」である。一方、(62)「友人に」は「砂岩を 見せる」主体を、(63)「工場主に」は「頼む」主体をそれぞれ表しているが、「見せてもらう」相手、「頼まれる」相手ということもできるだろう。このように、「名詞+に」が主体を表すのか、それとも、「受け手」を表すのかは、動詞の語義の特徴あるいは形によって決定されるが、いずれの場合にも「意思を持つ人としての相手」を表しているといえることができる。人を表す名詞全般が用いられるであろう。

意思を持つ人以外を表す名詞が用いられた場合には、動詞の語義に変更がもたらされる、あるいは、比喩的に用いられることになる。

- (64) わたしは、ひろゆきおじさんの家で、おばあちゃんとかうえんにいったときに、きれいなブローチをひろいました。そのブローチを、イエスさまにあげました。(『ポプラの秋』124)

(64)「イエスさまに」は「(その) ブローチを あげる」相手であるが、「(その) ブローチを イエスさまに あげる」は「イエスさまにお供えする」といった意味で用いられている。「イエスさまに」が「あげる」と結合しているために、その語義に変更がもたらされている、あるいは、比喩として用いられているといえることができる。こうした用法を基準として名詞を選び出すことも可能であろう。

3.2.2. 地点を表す「名詞+に」の用法から

「名詞+に」は、動詞との結合において、存在地点を表わす場合、到着地点⁹を表す場合がある。この違いは結合する動詞の語義の特徴によるといえる。

(65) 雨の降る通りにそんな人影は見当らなかったし、敦子の背後の壁に覗き孔があるとも思えなかったので、敦子は最後には、もうそのことは気にしまいと決心したが、… (『雲の宴 (上)』 28)

(66) 魚春のビルの屋上には、妙な小屋が建っている。(『小屋のある屋上』 14)

(65)「壁に」は「覗き穴がある」地点を、(66)「屋上に」は「小屋が 建っている」地点をそれぞれ表している。動詞の語義に存在を表すという特徴がある、あるいは、「建っている」のように動詞の形が存在を表すものである。

(67) そのまま裏のドアから細い廊下に出る。(『椿山課長の七日間』 29)

(68) そういえば昔、たった一度きりだったが、美羽と一緒に海に行ったことがあった。(『この世界で君に逢いたい』 28)

(67)「廊下に」は移動「ドアから 出る」の到着地点を、(68)「海に」は移動「行く」の到着地点をそれぞれ表している。ここでは、動詞の語義が移動を表すという特徴がある。

このように、「名詞+に」が存在地点を表すか、それとも、到着地点を表すかを決定するのは、結合する動詞の語義の特徴等であるが、いずれの場合にも名詞の語義に「地点・場所・空間」という特徴があるということができる。

なお、(67)「廊下」は「人」にとっての「地点・場所・空間」であるが、(65)「壁」は「覗き穴」にとっての「地点・場所・空間」である。また、

(69) 大吉はすでに帽子をかぶり黒いショルダー・バッグを肩に掛けていた。(『雲の宴 (上)』 13)

(69)「肩に」は「ショルダー・バッグを 掛ける」場所であるが、人にとっては地点・場所・空間とはいえない。「名詞+に」として用いられる名詞の語義に地点・場所・空間という特徴がある、という場合には、存在主体／移動主体が何であるかを考慮に入れることが必要であろう。

3.2.3. 時点を表す「名詞+に」の用法から

(70) 明治十年の二月に永野信夫は東京の本郷で生まれた。(『塩狩峠』 5)

⁹ 拙稿 (2009) では「移動の終了場所」と呼んだ。

(70)「(明治十年の)二月に」は、「永野信夫」が「本郷で 生まれる」という出来事の時点を表している。「二月」の語義は結合する語からは独立して「時点」という特徴を持っているといえることができる。

3.2.4. 「名詞+に」の用法からの名詞分類の可能性

以上より、「名詞+に」と他の語との結合から、

- (α) 相手を必要とする動作を表す「名詞+に+動詞」における、「意思を持つ人」を表す名詞（転義あるいは比喩的用法の場合には異なる名詞グループとなる）
- (β) 「名詞+に+動詞」における、地点・場所・空間を表す名詞（三語の関係によって決定される）
- (γ) 「名詞+に」として時点を表す名詞

といった名詞分類が可能である。

4. 「名詞+で」「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」と他の語との結合から明らかになる名詞の語義の特徴

4.1. 「名詞+で」と他の語との結合から明らかになる語義の特徴

4.1.1. 材料／道具／手段を表す「名詞+で」の用法から

(71) どうせ和紙で出来たどこにでもありそうな面なのだから、…（『きつねのはなし』55）

(72) 魚春の、入り口から少しはいったところの壁には、一枚の写真が画紙でとめてある。（『小屋のある屋上』10）

(73) とにかくその夜、向坂伸行は初ボーナスで買って三年目のノートパソコンで、そのライントノベルのタイトルを検索したのである。（『レインツリーの国』11）

(71)「和紙で」は「面」が「出来る」材料を、(72)「画紙で」は「写真が とめてある」道具を、(73)「初ボーナスで」は「ノートパソコン」を「買う」手段を、「ノートパソコンで」は「タイトルを 検索する」手段をそれぞれ表している。いずれも結合する動詞に情報を加えているが、「名詞+で」がこれらを表すに際しては、何が作られたのか、どのようなことが行われたのかということとの関係が問題になるであろう。

4.1.2. 動作が行われる地点・場所を表す「名詞+で」の用法から

「名詞+で+動詞」によって、何らかの場所における動作が表される場合がある。「場所」という語義の特徴を持つ名詞として語彙分類が可能である。

(74) 明治十年の二月に永野信夫は東京の本郷で生まれた。（『塩狩峠』5）

(75) 平蔵さんは、わたしがときどき魚春で買い物をしていることに、その時は気づいていなかった。（『小屋のある屋上』12）

(74)「本郷で」は永野信夫の「生まれる」という出来事の地点を、(75)「魚春で」は「わたしが買い物をする」地点をそれぞれ表している。ここでは語義が地点・場所・空間という特徴を持つ名詞が用いられるが、いずれも人の動作にとっての地点・場所・空間である。

(76) ビルの裏手にまわると、三段になった鰺やえぼ鰺が、ネットの中で一夜干にされているのである。(『小屋のある屋上』13)

(76)「ネットの中で」は「鰺やえぼ鰺が 一夜干しにされる」場所であるが、人にとっての場所とはいえないであろう。存在地点／移動に関係する地点の場合同様、主体が何であるのかによって選ばれる名詞が異なり、三語の関係が問題になる。

4.1.3. 動作の様態を表す「名詞+で」の用法から

(76) ああそうなの。平蔵さんはぼかんとした顔で答えた。それから、「ごめんね奥さん」と続けた。(『小屋のある屋上』11)

(77) 「このことは勘弁して下さい」相手は低い声で言った。(『雲の宴(上)』140)

(78) 顔を出した赤毛の女が、怪訝そうな表情で二人を見つめた。(『雲の宴(上)』16)

(76)「ぼかんとした顔で」は「答える」ときの、(77)「低い声で」は「言う」ときの、(78)「怪訝そうな表情で」は「女が 二人を見つめる」ときの、それぞれの様態が表されている。いずれの場合にも何らかの修飾語をともなっているという特徴がある。どのような動作がどのような様態で行われるかによって名詞が選び出されるであろう。

4.1.4. 原因を表す「名詞+で」の用法から

(79) ひょっとしたら、雨で濡れた髪がまだべつとり額に貼りついている、赤い毛糸の長いマフラーを肩にかけて、ボーイフレンドと話し込んでいる若い女が、そうなのかもしれない、…(『雲の宴(上)』28)

(80) 父が交通事故で急死して慌ただしい何日間かが過ぎると、…(『ポプラの秋』10)

(79)「雨で」は「髪」が「濡れる」原因を、(80)「交通事故で」は「父が 急死する」原因をそれぞれ表している。名詞の語義が現象／出来事を表すという特徴があるが、「名詞+で」が原因を表す場合には、どのような現象／出来事がどのようなことの原因になりうるかという関係が問題になるであろう。

4.1.5. 「名詞+で」の用法からの名詞分類の可能性

以上より、「名詞+で」と他の語との結合から、

(a) 材料／道具／手段を表す名詞

- (β) 動作が行われる地点・場所を表す名詞
- (γ) 動作が行われるときの様態を表す名詞
- (δ) 他の出来事の原因である現象／出来事を表す名詞

を選び出すことができるが、いずれの場合にも、その語がそれらを表すためには、他の語との関係が問題になり、その語の語義だけでは決定されない。

4.2. 「名詞+から」「名詞+まで」「名詞+へ」と他の語との結合から明らかになる名詞の特徴

4.2.1. 開始点を表す「名詞+から」の用法から

- (78) 「実はね、三週間ほど前に黒田くんから連絡をもらったのよ」(『この世界で君に逢いたい』10)
- (79) 「日本医大と申しますと、病院からこちらへいらっしゃったのですか」(『椿山課長の七日間』22)
- (80) 徳江は左右の形が違う目でまたじつと千太郎を見たが、ややあって、手提げ鞆から布製の財布を取り出した。(『あん』13)
- (81) 機内の小窓から海を眺めていると、海面に映る黒い影が目に入った。(『この世界で君に逢いたい』7)
- (82) 屋上のスピーカーから、店内放送のように清らかな声が流れてくる。(『椿山課長の七日間』21)
- (83) 厨房に入ると、昨夜から水に漬けておいた小豆がボウル一杯にふくらんでいた。(『あん』31)

(78)「黒田くんから」は「連絡を もらう」人、(79)「病院から」は「こちらへ いらっしゃる」出発地点、(80)「手提げ鞆から」は「財布を 取り出す」場所、(81)「小窓から」はそこを通して「海を 眺めている」物、(82)「スピーカーから」は「声が 流れてくる」物、(83)「昨夜から」は「小豆」を「水に つけておく」開始時点をそれぞれ表しているが、いずれも何らかの「開始点」を表している。(78) からは「名詞+に」の場合と同様、人を表す名詞という特徴が明らかになる。(79) は人にとっての出発地点になる場所、(80) は物を移動させる開始地点としての場所で、存在地点／移動に関係する地点を表す名詞と同様、移動する主体あるいは対象との関係が問題になる。(81) (82) では視覚あるいは聴覚でとらえることが可能になることと関係がある。(83) は名詞の語義が時点という特徴を持ち、グループを形成する名詞であるといえる。

4.2.2. 終了点を表す「名詞+まで」の用法から

- (84) 結局空港から宿泊先の民宿まで、スーツケースを引きながら歩くことにした。(『この世界で君に逢いたい』13)
- (85) 昨夜までそこには、見事なダリアが咲き誇っていたはずだ。(『ようこそ、わが家へ』39)

(84)「民宿まで」は「空港から 歩く」終了地点を、(85)「昨夜まで」は「ダリアが 咲き誇っている」終了時点をそれぞれ表しているが、「民宿」は地点・場所を表す、「昨夜」は時点を表すという特徴を各語義に持っているといえることができる。

4.2.3. 行く先を表す「名詞+へ」の用法から

(86) 216 号線をまっすぐに東へ向かっていると、右手に小高い岩山が見えてきた。(『この世界で君に逢いたい』16)

(87) ふと気配を感じて身を起こすと、二階へ続く階段下の暗がり人影があった。(『きつねのはなし』50)

(86)「東へ」は「216 号線を 向かう」行く先を表しているが、車での移動の行く先ということになる。ここでも移動主体との関係が問題になる。(87) では空間移動は表されておらず、「二階へ」は「階段」が「続く」先を表している。このように空間移動ではなく位置関係が表される場合でも、「名詞+へ」には存在する物との関係が問題になるといえる。

5. 名詞分類の基準になり得る結合関係

以上、きわめてわずかな範囲ではあるが、格助辞をとまなう他の語との結合から明らかになる、語義の特徴に基づく名詞分類の可能性を探ってきた。主なものをまとめてみる。

- (I) 「名詞+が+動詞」等において主体を、「名詞+に+動詞」において相手を表す場合、語義が「意思を持つ人」という特徴を持つ名詞を選び出すことが可能である (2.1、3.2.1)。この特徴を持たない名詞が用いられると、結合する語は転義あるいは比喩的用法において用いられる (2.2)。
- (II) 「名詞+を/名詞+に+移動を表す動詞」「名詞+に+いる/ある」「名詞+で+動作/活動を表す動詞」等の結合から、語義が「地点・場所・空間」という特徴を持つ名詞を選び出すことができる (3.1.2、3.3.3、4.1.2、4.2)。この場合には、その地点・場所・空間になり得るかという面から、主体あるいは対象との関係も問題になる。
- (III) 「名詞+が+起こる」「場所を表す名詞+で+名詞+が+ある」「名詞+で+動詞」等の結合から「自然現象/社会的事象」を表す名詞を選び出すことができる (2.4、2.5、4.1.4)。この場合には、選び出される名詞が重なり合うか等、基準間の関係も問題になる。
- (IV) 「名詞+を+動詞」において動作の対象を表す名詞、「名詞+が+形容詞」において状態・性質の主体を表す名詞は、各動詞/形容詞を中心に名詞のグループを形成する (2.6、3.1.1)。この結合において本来用いられない名詞が用いられると、動詞/形容詞は転義において用いられることになる。
- (V) 「時点」を表すという語義の特徴を持つ名詞は、文の他の成分から独立的に選び出すことが可能である (3.2.3、4.2.1、4.2.2)。

【参考文献】

- 岡田幸彦 (2009) 「現代日本語の移動動詞と場所名詞の格」(『日本アジア研究：埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要』6：39-61)
- (2016) 「現代日本語名詞の「格」記述のための序論——格形式と意味決定要因——」(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊1『小出慶一教授退職記念論文集 ことばの本質を求めて』44-56)
- (2017) 「現代日本語の連用成分についての一考察——名詞の文法的意味・動詞の語義から——」(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2『仁科弘之教授退職記念論文集 言語についてのX章 言語を考える、言語を教える、言語で考える』142-156)
- (2018) 「現代日本語における語結合——日本語「連語論」再検討——」(『埼玉大学紀要(教養学部)』53-2：73-87)
- (2022) 「現代日本語の文の構成についての一試案——「名詞+は」「名詞+が」と他の構成要素との関係の面から——」(拓殖大学日本語教育研究所『日本語教育研究』7：77-102)
- 奥田靖雄 (1962) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983：281-323))
- (1967) 「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983：325-338))
- (1968-72) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983：21-149))
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』秀英出版
- (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 増井金典 (1997) 『「が」と「は」についての研究』滋賀女子短期大学
- 宮島達夫 (1966) 「意味の体系性」(宮島達夫 (1994：145-175))
- (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- (1977) 「語彙の体系」(宮島達夫 (1994：7-42))
- (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』
- Blake, B.J. (2001) *Case*. Cambridge University Press.
- Lyons, J. (1977) *Semantics 2*. Cambridge University Press.

【用例】

浅田次郎『椿山課長の七日間』集英社文庫／有川浩『レインツリーの国』新潮文庫／池井戸潤『ようこそ、わが家へ』小学館文庫／川上弘美『小屋のある屋上』(『どこから行っても遠い町』新潮文庫)／瀬尾まいこ『あと少し、もう少し』新潮文庫／辻邦生『雲の宴 (上)』朝日文庫／ドリアン助川『あん』ポプラ文庫／藤岡陽子『この世界で君に逢いたい』光文社文庫／三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫／森見登美彦『きつねのはなし』新潮文庫／湯本香樹実『春のオルガン』『夏の庭』『ポプラの秋』新潮文庫／米澤徳信『満願』新潮文庫